

# あるむぜお57

府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 57

2001年9月20日



2 ケヤキ並木 Part2 ケヤキは街路樹として適しているか

3 展示会への招待 「特別展 遺跡の世界 2001」

4-5 ノート 現代詩人 村野四郎の投句時代

6 最近の発掘調査 「神」「戌」と墨書された土器

7 収蔵資料の紹介 六所玉河図巻

8 ナチュラルセブン 第6話「園内散策計画」

## ケヤキ並木 Part2

表紙写真 神社側から見た現在の「馬場大門ケヤキ並木」

府中の「馬場大門ケヤキ並木」は、源頼義・義家親子の寄進に始まる歴史的背景がそのルートと言われていますが、紆余曲折を経て21世紀の今現在では、まさに街づくりに欠かせない重要な景観として、その役割を担っていると言えるでしょう。

## ケヤキは街路樹として適しているか

中村 武史

道路や街路に樹木を植えるという行為は、人が集まり住んで集落が形成される際、つくられた街路を装う目的で植栽されたことに始まっています。中国では、周代 (B. C. 1100~A. D. 249年) の頃、すでに道路に並木が植えられていたそうです。その目的は道路の位置を定め、境界を守り、通行者が道を見失わないようにするためと、雨露や酷暑からの防御であったと考えられています。

『日本書紀』(720年成立)や『万葉集』(760年頃成立)によると、藤原京以前に並木・街路樹としてクスノキ、クワ、タチバナが植栽されていたことがわかります。桓武天皇が平安京に都を移した時には、街路樹にカワヤナギやエンジュ、地方国道には果樹を植えたといえます。鎌倉時代にはヤマザクラも植えられました。織田信長は1575年、東海・東山両街道にマツとヤナギを植えさせ、また、上杉謙信や加藤清正らもマツ並木の造成に力を注いだとされています。江戸時代では1604年、徳川幕府が街道大改修の折、両側にマツやスギを植えさせています。

明治になると、クロマツ、シダレヤナギ、ヤマモミジなどが使われていましたが、やがて東京市における街路樹はイチヨウ、スズカケノキ、ユリノキ、アオギリ、トチノキ、トウカエデ、エンジュ、ミズキ、トネリコ、アカメガシワの10種に定められます。大正時代には、地方都市にも街路樹が植えられるようになりましたが、大半はこの東京市規定に従ったもので、その土地の郷土色を強調するものではなかったようです。

昭和に入ると次第にそれぞれの地方で特色ある樹種が用いられるようになり、現在の日本の都市では、スズカケノキ、イチヨウ、シダレヤナギといった樹木が主流をなしています。傾向としては外来種が多く用いられ、都市の大気汚染・排気ガスに対する抵抗力の強さを考慮しながら種類を限定しているようです。府中の場合、その歴史的背景から必然的に市の木をケヤキとした経緯もあり、「馬場大門ケヤキ並木」については都市を考慮して植えた並木でないことは確か

す。

街路樹には、他に防火・防風・防暑・そしてチリやホコリを樹冠で防ぎ、かつ葉の緑が人の神経を和らげるという効用がありますが、同時に都市の性格に見合った樹種を選ぶことで、より有効にその力を生かしています。例えば工業都市では、ばい煙に強いポプラ、ニセアカシア、イチヨウなどが最適で、弱いソメイヨシノやアカマツなどは、逆に選択されない傾向にあります。観光都市ではその都市の特徴や季節を考慮して、郷土樹種や花木を植えています。また、官公地区では樹姿の整ったイチヨウ、ケヤキ、ユリノキといった種類が多く使われています。都市の主要街路に特色ある樹種を植えることで、都市景観をより美しく独創性豊かなものに創り上げているのです。長野のアンズ、八王子のクワ、高松市のクスノキなどといった成功例も多く、歴史に基づく府中市のケヤキはまさしくこれに該当する最適種ということが言えるのではないのでしょうか。

「馬場大門ケヤキ並木」の始まりはケヤキだけの単列植だったのですが、今日に至る長い間で、他の樹種による補植や献木が行われたり、あるいはケヤキ本体の伐採により、イヌシデ、クリ、コナラが代わってその空間に進出すると言った現象も起こりました。1924年(大正13年)の天然記念物指定を機に、ケヤキをはじめスギ、イロハモミジによる大規模な植栽が行なわれる一方で、コナラ、イヌシデ、クリ、エゴノキなども最盛期を迎え、一大混合樹林帯の趣を形成しました。昭和に入ると人為的な大規模伐採こそありませんでしたが、補植も行われず、次第に各樹種とも減少していきます。これも昭和40年代以降には、再び並木の保護運動が盛んになり、総本数は上向きしました。現在でもやはりケヤキだけで成立する並木ではありませんが、歴史的な第一歩から、常に保護、放置、破壊という各々の時代背景を担った人の手によって、構成や本数を変化させつつ存続してきた、極めて特徴のある、我が街の並木なのです。

□ 展示会への招待

今年の「遺跡の世界」展は、〈縄文ムラのなりたち〉と〈最新発掘速報〉の2部構成とした。ここではそのうち〈縄文ムラのなりたち〉の展示コンセプトを紹介しよう。

今回展示の中心になるのは、府中市の北端にある武蔵台遺跡で発掘された、縄文時代早期のムラの跡である。

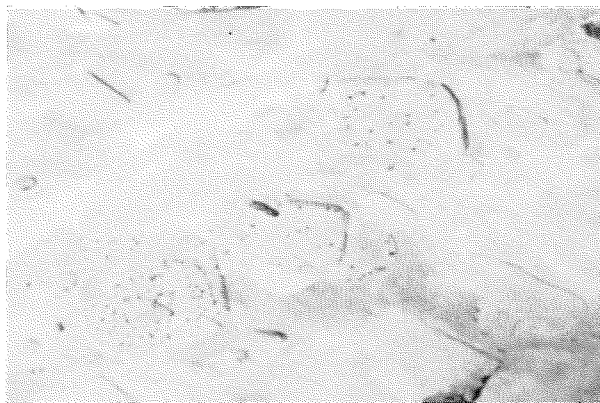
定住革命

1万年にも及ぶ縄文時代のなかで、早期という時期はけっして目立つ存在ではない。しかし、早期には列島史上極めて大きな変革があった。竪穴住居が普及し、複数の竪穴住居からなるムラが出現したのだ。竪穴住居は台地に大穴を穿つことから明らかのように、移動生活には適さない。つまり、縄文早期こそ、列島で人々が定住へ向けて大きな前進をした時期なのである。

武蔵台遺跡

武蔵台遺跡は縄文早期のなかでも初頭に属し、今から9,000～8,000年前に遡る。定住に向けていち早くその一歩を踏み出したムラの一つといってもよい。しかも、発掘された竪穴住居跡は33棟にのぼり、土器をはじめ石皿や磨り石など膨大な遺物が出土している。南関東にある縄文早期初頭の遺跡としては、最も豊かな情報に恵まれた遺跡なのだ。

何が縄文人を定住へと向かわせたのか。定住によって、縄文人は何を得て、何を失ったのか。武蔵台遺跡の発掘によって得られた豊かな、そして多様な情報をもとに、縄文ムラのなりたちを探ってみよう。



9/15 (祝) ~ 10/21 (日)  
9/17・25, 10/9・10は休館



大学生の頃



生家の店蔵 昭和初期 初荷の風景

## ▼ 生い立ち

村野四郎が甲州街道沿いの上染屋村（現府中市白糸台1丁目）に生れたのは20世紀の最初の年1901年（明治34）10月だった。4月には後の昭和天皇も生れていた。文学作品では国木田独歩の「武蔵野」や鳳（与謝野晶子）の「みだれ髪」が発表された年でもある。

この頃日本は、明治維新後初めての対外戦争（1894－1895年 日清戦争）を経験した後、1904－1905年の日露戦争の前、戦間期と言える時期であり、政治のみならずあらゆる面で国際化の渦の中に巻き込まれつつあった。

“ハイカラ”の風は東京近郊の、調布と府中というふたつの旧宿場町の間位置する村にも、そこはかとなく寄せはするものの、まだまだのどかな風景だった。

四郎の生家は、江戸時代後半の古文書によれば、代々儀右衛門を名乗り、村の組頭や名主を勤めたが、文政3年（1820）から居酒屋渡世を始めたという記録が残っている。当時、宿場などの町場ならともかく、村にあって商売ができるのは余裕のある証である。この商売は明治になっても続き、1875年（明治8）に酒類請売営業免許鑑札を取得した記録がある。

四郎の父の代には、扱う商品は酒の他、食品から建築資材にまで広がっていた。さらに明治末年には、舶来のスタンダード石油の特約店として大きな利益を得るようになった。

ともあれそういう中で、四郎はその名のとおり父寅蔵の4男として生を受けた。兄弟は多く、男子は一郎から七郎まで、女子は姉4人、妹1人、あわせて12人だった。

中でも特に7歳上の次郎と、3歳上の三郎の2人から受ける影響は大きかった。もともと父も俳句をたしなんだりする家風ではあったが、村野家に新しい文学熱を持ち込んだのは次郎だった。

上染屋村で初の中学生として、立川にできた東京府立二中に通い、その後早稲田大学に進んだ次郎は、後年歌人として活躍することになるが、その萌芽は三郎と四郎を動員したコンニャク版の家庭雑誌『藻塩草』の刊行にも見られた。

残念ながら今回の調査ではその実物を探し出すことは出来なかったが、それに俳句を載せたのが、小学生村野四郎の文芸初作品だった様である。この辺の様子には四郎の晩年に書かれた幾つかの回想的記述に詳しい。その主なものを記しておく

- ① 1965年（昭和40）5月～ 『新潟日報』に「鶏肋断想」連載（単行本は9月に毎日新聞社刊）
- ② 1968年（昭和43）秋または冬 「わたしの誌的遍歴」執筆（発表は没後1985年『戯』誌上、単行本は1987年に沖積舎刊）

で、類似のものとして、大野純執筆を基にした

- ③ 1968年（昭和43）12月 「村野四郎全詩集」（筑摩書房刊）巻末年譜

がある。

### ▼句作の頃

それらによると、多磨尋常高等小学校から府立二中、1年間の浪人生活を経て慶応大学の予科へと進学する数年間、専ら俳句を作っては当時の文学青年たちの例にもれず文芸雑誌に投稿していたという。

また、北原白秋等の詩に心を震わせながらも俳句と言う形態を選んだのは、白秋の門下で頭角をあらわしていた次郎や西条八十に認められて象徴詩を書いていた三郎に対し、違うことをしようとしたのだと書いている。

②には、当時新潮社から出ていた『文章倶楽部』の内藤鳴雪が選者の俳句欄に投書し始め、「秋晴れの屋根に立ちたる男かな」他1句などが選外佳作に採られ「……このような句と、六号活字で組まれた村野哀醒という自分の名とを、じっと倦かずながめて胸をときめかした。立川駅と学校との間の麦畑の明るい照り返しの中に立ち止って、目がぼおっとするまで文章倶楽部を見つめていた。」と、初々しい若者の気持ちを記している。

そして、より自由な形式を求めて、荻原井泉水が撰する春陽堂発行の「中央文学」に投稿ししたが、その第1回目、2回目と続いて1等、2等になった、とある。その句は、①では最初のが「兄弟が寝ついた夜の噴水」で、次が「病人夢の話をする朝の白い蒲団」である。ただし、②、③ではこれが逆の順序になっている。

### ▼四郎の投句

この入選作の順序の確認と、四郎少年が麦畑で見入った小さな六号活字を私も見てみたいと思い、駒場の日本近代文学館で「文章倶楽部」のマイクロフィルムと「中央文学」の1917—1921年分を繰ってみた。

確かに虫眼鏡で見るような小活字の並びには、多くの青年達が雑誌というメディアを通して、発表の機会を得ようとしていた時代が感じられる。目を凝らして自分の名前を探す四郎青年が身近にいるようだった。

その中から四郎(雅号は哀醒)の作品を拾ったのが次の表である。雑誌の選者の混同や、作品の句に先の記述と食い違うところがあるのは、数十年経った記憶に間違いが生じたと思われる。荻原井泉水の選で、最初と次の投稿が1、2等になったという件も、選に入ったときの感慨が大きく印象づけられたのだろう。

ただ日本近代文学館本には欠号も有り、「病人夢の話……」の句がこの中に見当たらない事でもあり、もう少し調査が必要である。

ともあれ、その後四郎はこの投稿をきっかけに井泉水の結社「層雲」に加わるが、大学生になり、ドイツ詩と出会うと“何か途方もなく大きな、そして洞穴のように暗くて奥ふかい世界”のあることを知り、生涯をかける近代詩・現代詩の世界への一人旅に踏み出したのである。

様々な詩的実験も重ねながら、“詩”の本質を追い求め続けた彼の原点はこの投句の時代にあった。

年月	誌名	発行	巻号	選者	投句者	作品	当選
1919年9月	文章倶楽部	新潮社	4-9号	石橋十堂	村野哀醒	蚊柱や馬に餌をやる宵月夜	秀逸
1919年10月	文章倶楽部	新潮社	4-10号	石橋十堂	村野哀醒	夕月に低き家竝や群れとんぼ	
1919年11月	文章倶楽部	新潮社	4-11号	石橋十堂	村野哀醒	雑草に唐辛子赤く雨晴るゝ	
1920年2月	中央文学	春陽堂	2月号	内藤鳴雪	村野哀醒	秋晴るゝ屋根に立ちたる男あり	
1920年9月	中央文学	春陽堂	9月号	荻原井泉水	村野四郎	童べ風にゆるゝ若苗持ちをり	
1920年10月	中央文学	春陽堂	10月号	荻原井泉水	村野四郎	父の棺送れば蜀黍道にせまり	
1920年11月	中央文学	春陽堂	11月号	荻原井泉水	村野四郎	蓮の葉いちめん水波むひとのゐる朝	
1920年12月	中央文学	春陽堂	12月号	荻原井泉水	村野四郎	ほっほっと飛立つ小鳥らに野はすっかり枯れ	
1921年1月	中央文学	春陽堂	1月号	荻原井泉水	村野四郎	泣こうと来し野には草暖う枯れみて	
1921年2月	中央文学	春陽堂	2月号	荻原井泉水	村野哀醒	晝深い陽梢にかゝり大樹伐らるゝ	
1921年4月	中央文学	春陽堂	4月号	荻原井泉水	村野哀醒子	久しい兄弟が寝ついた夜の噴水	2等
1921年7月	中央文学	春陽堂	7月号	荻原井泉水	村野四郎	街に火事ある郊外のそよともせぬ麦畑	秀逸
1921年10月	文章倶楽部	新潮社	6-10号		村野四郎	(散文)「弟」	秀逸
1921年11月	中央文学	春陽堂	11月号	荻原井泉水	村野哀醒子	夕の葉ひらひら風となり子を看とりをる	

### 企画展 生誕100年記念 村野四郎と故郷—20世紀とともに—

会期：11月3日(土)～25日(日)

1939年(昭和11)、第2詩集「体操詩集」で世間に鮮烈な印象を与えた村野四郎。20世紀日本の“詩”を代表する一人の詩人の生涯を、作品と遺品から故郷府中にあった時代を中心に振り返ります。

## 最近の発掘調査

# 「神」「戌」と墨書された土器

## 整理事務所から 府中市教育委員会 江口 桂



須恵器に墨書された「神」の文字  
ドミール府中地区



須恵器に墨書された「戌」の文字  
東京電力府中工務所別館地区

遺跡の発掘調査で見つかる文字資料の代表格といえば、大半の人が木簡を思い浮かべるでしょう。しかし、土器に文字が書かれた墨書土器も、役所の性格や古代人の精神生活を考える上で貴重な情報を提供してくれます。ここでは、整理作業中に発見された「神」と「戌」の墨書土器についてお話ししましょう。

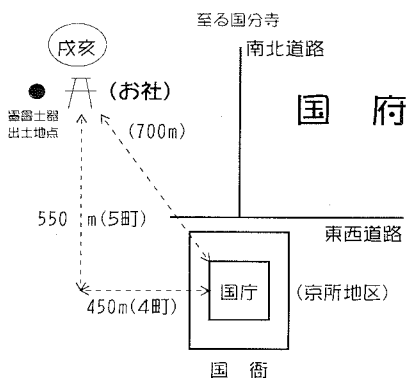
「神」と「戌」の墨書土器は、本誌第50号で紹介した推定「国府を守護する社」跡から西へ約50mほど離れた、2つの発掘調査区で出土しました。「神」墨書土器は9世紀前半、「戌」墨書土器は9世紀後半（ともに平安時代前期）頃のもので、「社」が造られた時期とほぼ重なります。

近年、各地の遺跡から出土する墨書土器は飛躍的に増加していますが、全体の出土土器量の中で、その占める割合は非常に少ない点が特徴とされています。武蔵国府でも、多種多様な墨書土器が出土していますが、その数は出土土器全体量の1%にも達しません。また、その記載文字数も1～2文字程度のものが圧倒的に多くなっています。これらのことから、墨書土器は、祭祀用に用いる非日常的（特別）な器に、日常使用する食器と区別するためのシンボルを記したものと考えられるようになってきました。

それでは、今回発見された「神」「戌」墨書土器について考えてみましょう。「神」は、器として食物（お供え物）を盛り、神に捧げるために書かれたと考えられます。そこには、文字を介して神と対話する意識もあったのでしょうか。一方「戌」は十二支の第11番目、方位では西北西を指します。「戌」は西北西を指しますが、「神」墨書土器が至近で出土していることを踏まえれば、この付近で西北西の方角に対する祭祀が行われていたと考えることができます。

また、「戌」はあくまでも西北西を指しますが、おおよそ西北方角に対する祭祀に結びつくと考えてもよいかもしれません。そうだとすれば、東方50mで発見された「社」跡と密接な関係があるといえましょう。つまり、今回出土した2点の墨書土器は、「社」跡が北西方向から来る災いを取り払うために祀られた国府の北西を守護する社である、という推測を補強する材料となります。

たった2点の墨書土器ですが、国府の中で行われていた祭祀の実体、そして国府の具体的な姿・形を考えることのできる資料なのです。



文献史料に登場する「戌亥隅神」と「国庁神」・「府中神」から考えて、推定国庁域から戌亥（西北）の方角で発掘された方形区画遺構を国府を守護する「お社」の跡と考えた。

# 六所玉河 図 巻

小野 一之



玉川が全国に6つ 府中の南側を流れる多摩川は、山梨の山塊に発し奥多摩を出て武蔵野の縁を流れ東京湾に注ぐ、全長138kmの川です。昔は「玉川」とも書きましたが、この東京の川も含めて北は宮城、西は大阪まで6つの玉川をセットにしたのが「六玉川」です。

歌枕から浮世絵へ「六玉川」は和歌で詠まれる名所、すなわち歌枕として平安時代以降知られるようになりしました。それぞれの玉川を歌った代表的な歌があって、それを踏まえて新たな歌が繰り返し作られていくうちに、特定の景物とイメージが各玉川に対して与えられることになったのです。江戸時代には、これが絵画化されます。特にシリーズものが好まれた浮世絵では、美人画と組み合わせた窪俊満や菊川英山、風景版画の歌川広重らによる数多くの「六玉川」が残されています。

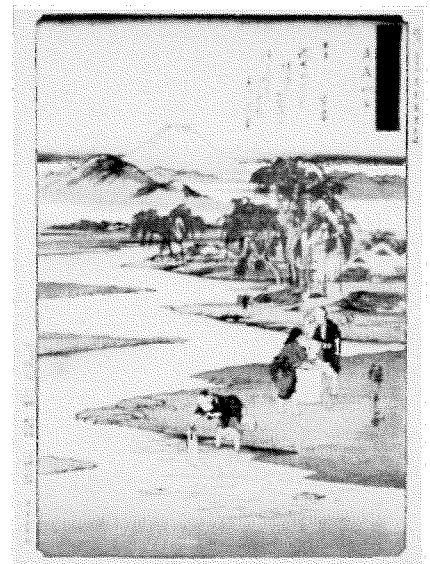
珍しい巻物の「六玉川」今回紹介するのは「井手の玉川」以下6場面の絵とそれぞれの和歌6首を書いた巻子本の「六玉川」で、題箋には「六所玉河」とあります。全長404cm、表裏に金銀を散りばめた料紙を用い、淡彩ながら丁寧な仕上げで、咲き乱れる山吹や萩の花もきれいです。歌は6人の公卿の自筆で、それぞれ「園中納言基勝卿」などと名前と官職を記した附箋が貼られています。絵の作者は不詳ですが、これによれば元禄年間（17世紀末）頃の作品と推定できます。

武蔵調布の玉川「六玉川」のうちわが多摩川は、こう呼ばれています。川で布を晒したり、杵で搥いたりする場面が必ず絵には登場します。「調布」とは、古代の税目のひとつで、地方の特産物として納められた手作りの布のことです。「た

づくり」と読むこともあります。調布市の名は、明治22年の合併でできた新しい地名ですが、府中から調布にかけて染屋・布田（布多）などの意味ありげな地名が残り、早くから注目されていました。万葉集の東歌に出てくる多摩川の布晒しの歌などは国府近傍の生産活動に従事していた人たちの労働歌なのでしょう。「六玉川」のなかでは唯一、民衆的な香りがする主題です。伝説的な光景 その後、歌枕として外の人から詠まれてきた古代の布晒しの光景は、江戸名所図会にも紹介され、近世には地元にも受け入れられてきたといえます。絵に登場する、布を搥くための古代の石臼という代物まで残っているくらいですから。

## 「六玉川」の構成

名前	現在地	和歌	季節・花・景物
井出の玉川	京都府井出町	駒とめてなほ水かはむ山吹の花の露そふ井手の玉川	春・山吹・馬
三島の玉川	大阪府摂津市	見渡せば浪の柵かけてけり卵の花咲ける玉川の里	夏・卵の花・村里
調布の玉川	東京都府中市調布市など	多摩川にさらす手づくりさらさらに昔の人の恋しきやなぞ	秋・柳・布晒し・衣打つ堅杵
野路の玉川	滋賀県草津市	明日も来む野路の玉川萩こえて色なる浪に月宿りけり	秋・萩・川に映る月
野田の玉川	宮城県多賀城市	夕されば潮風越してみちのくの野田の玉川千鳥鳴くなり	冬・松・千鳥
高野の玉川	和歌山県高野町	忘れても涙みやしつらむ旅人の高野の奥の玉川の水	高野山・弘法大師



広重の「調布の玉川」（本館所蔵）

# ナチュラル セブン

## 第6話 「園内散策計画」

中村 武史

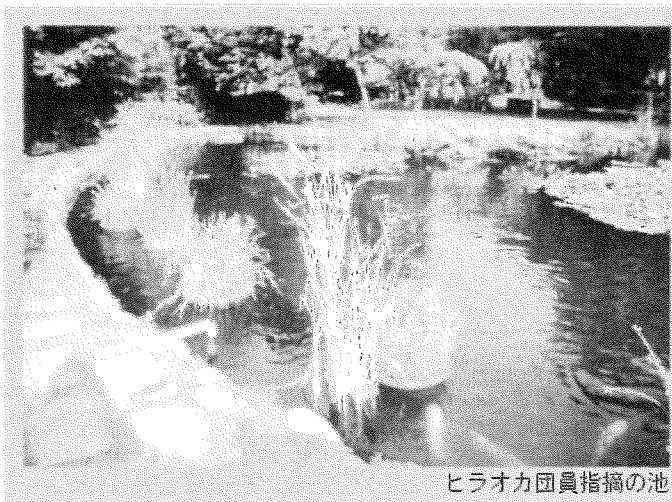
思い起こせば13年前、オープン間もない頃に実施した園内植物観察会。不馴れであるが故、下見をして臨んだにもかかわらず、何と云うことであろう、本番では主役の野草がすっかり除草されており、惨憺たる結果となった。景観重視のため、急遽雑草採りの業者が入ったのだろう。怒った故ソネ植物班長が緊急に調査団、及び博物館担当者を招集し苦言を呈したことは言うまでもない。これをきっかけに園内観察会は凍結された… 今回のお話しは、その後再び観察会を立ち上げるきっかけとなった予備調査会的一幕。すべては事実に基づいた想像の世界…

開設から10年の歳月が流れ、郷土の森もずいぶんと装いが変わっていた。「そろそろ園内も良い感じじゃないのかな？」ソーマ副団長が提案する。最近、郷土の森で野鳥センサスを頻繁

に行っていることから好感触を得ている様子である。「でもソーマ先生、野鳥はいいかもしれないが、他ではどうなの？」すかさずイズミ団長の質問が飛ぶ。さすがに団長は、観察会凍結の原因になった植物の生育状況が気になるようだ。「では丁度良い機会だからみんなで園内散策といきま

すか。」これは大御所、クモ博士のカヤシマ副団長の声。「いや、どうせなら一般の参加者も募りましょうよ。」と横からシマムラ地理班長。観察会再考のチャンスに全員の声は高まり、ついにプレ園内観察会として、下調べを兼ねたものが行われることになった。

それにしてもよく揃ったものだ。イズミ、ソーマ、カヤシマ、シマムラ、…各分野のオーソリティーによる現場検証に同行出来るとあって、参加者もいささか興奮ぎみである。一行が歩き出して間もないうちに、郷土の森10年間の自然再生力を示す光景が飛び込んできた。郷土の森は、もはやひとつの生態系と言っても良いほどに変貌を遂げていたのである。木々は青々とした葉をその身いっぱい飾り、蝶や甲虫類もあちらこちらで目立っている。飛来する野鳥も常に20種をくだらない様子で、営業しているものも見受けられる。目の当たりに見る園内の変わりように調査団のメンバーも驚きの表情を浮かべていた。ソーマ副団長が、



ヒラオカ団員指摘の池

「これはもう十分に観察の対象だなぁ。」とつぶやくとすかさずイズミ団長、「死んだソネさんが見たら…」とうなずく。しばらくは感慨深い一時だったが、カヤシマ副団長の発言がそれを一変させた。「だけど、クモは少ないですよ。たぶん樹木に殺虫剤を使っているんですな、困ったもんだ。」ソーマ副団長が反論する。「でも先生、自然生態園というコンセプトで造られているわけではないので、管理のため人手が入るのは仕方ないことでは…」堅い形相でカヤシマ副団長、「それじゃあダメなんですよ！サンクチュアリにしるとは言わんが、ある程度の放置がないと。」困ったように、「しかしそれでは郷土の森博物館の目的自体に偏りが出て…」ついにキレた、「何を言う、あなたは本当に調査団か？

職員みたいな口を聞いて！」何とか話題を変えようと、昆虫班のヒラオカ団員が適切な意見。「この池も景観としては抜群ですが、中心から徐々に浅く作り直してもらって湿地のようになり、トンボが集まりますよ。どうしても景観重視で自然教育的な配慮に欠けている所がありますからね。ほら、今流行りのビオト

プづくりみたいな発想がないと。」「あっ、それだったら園全体の地形そのものも造成し直してもらいたいですね。府中の台地と低地がもっと顕著にわかるような…」今度は地理のシマムラ班長が無理難題を吹っ掛ける。こうなると言いたい放題である。それぞれの分野で主義主張が対立し、ついに收拾不能の小競り合いとなり、参加者は呆然とその光景を眺めるだけ。

「まあまあ、皆さん熱くなるのは結構ですが、もうそのくらいで。郷土の森は、今後の良きテーマとしてじっくりと考えていけばいいじゃないですか。」イズミ団長の仲裁でこの場は納まったが、団員間の雰囲気陰湿になってしまったことは否定できなかった。

散策の結果は収穫十分、即園内観察会の実施にゴーサインがくださったことは喜ぶべき事実なのだが、調査団内部の不協和音が少々気かりである。後にこれが調査団始まって以来の存亡危機に繋がるうとは、この時点で知る由もなかった…。